

人類文化の主要矛盾「自由 vs 愛」を考察する (2) 個人における「自由 vs 愛」の矛盾・葛藤と「倫理」

中川 徹 (大阪学院大学 & クレプス研究所)

概要

本研究は、社会的な問題に TRIZ/CrePS 方法論を適用した第 2 報である。前報で、人類文化の「第 1 原理: 自由」と「第 2 原理: 愛」とに対立があり、それが人類文化の歴史を通じて未解決の「人類文化の主要矛盾」であり、その対立を調整する可能性を「倫理」に求めた。本報は、社会階層の根底である「個人(と個人間)のレベル」での、「自由・愛・倫理」の関係を詳しく考察した。人間の内面は、感覚・感情と「欲・欲求」がベースにあり、「悪の心」と「良心」の葛藤がある。「悪の心」に打ち勝ち、根源的な生きるエネルギーと「良心」を育む指針が「倫理」である。「自由 vs 愛」のさまざまな矛盾は、「倫理」が不十分なときに深刻化する。「倫理」、特に、「人間としての本質的平等」を中心とする「基本的人権」の概念が、主要矛盾「自由 vs 愛」を解決する鍵である。

本研究は、社会的な問題に TRIZ/CrePS 方法論を適用した第 2 報である。前報では、日本社会における貧困の問題を考察し、国民の意識の中にある「自己責任論」と「助け合い精神」との対立が問題の根底にあることを認識した。その対立が、「競争に勝ち、生き残る」ことを目指す「自由」の原理と、「他を助け守り、協調する」ことを目指す「愛」の原理との対立であること。さらに、人類文化において第 1 原理の「自由」と第 2 原理の「愛」とが矛盾を内包し、「自由 vs 愛」が「人類文化の主要矛盾」であり、人類文化の歴史を通じて未解決であること、を認識した。また、自由と愛の両者を動機づけ調整しうるものが「倫理」であると考えた。

本研究では前報の考察をさらに進め、社会システムの階層の一番根底にある、「個人(および個人間)のレベル」での、「自由・愛・倫理」の構造を考察した。考察の方法として、一人の人の成長を年令時期(乳児・幼児期、学童・少年期、青年期、壮年期、老年期)で特徴づけ、その内面と行動のパターンを「自由・愛・倫理」の観点から理解した。ついで、これらに顕われた内面と行動を特徴づけるキーワードを多数列挙し、「札寄せ」法でその関係を「見える化」して、「自由・愛・倫理」の内部構造、矛盾・対立の構造を文章として書き出していった。その結果、前報を補強・発展させ、以下の理解を新たに得た。

(a) 個人の内面において、人間として望ましいあり方の指針を「倫理」と呼び、それを「人類文化の第 0 原理」とした。内面には、感覚・感情をベースにして、さまざまな「欲・欲求」がある。それは一面では「悪の心」になるが、同時に、生きるエネルギーや自己実現などの基本欲求と「良心」になる。この「悪の心」に打ち勝ち「良

心」を育てようとする指針が「倫理」である。「人間としての本質的平等」を中心とする「基本的人権」の概念が、「倫理」の一部を明文化している。

(b) 第 1 原理: 「自由」は、「自分で判断し行動して、生きる」ことを目指す。主体的に「自分の幸福と利益」を求め、「競争に勝つ」ことを目指す(「競争」は自分の「自由」と他者の「自由」との対立の典型である)。このようにして得られた「新しいもの(思想、文化、システムなど)」が、人類文化を発展させると理解される。「(社会的)勝者」は、自分(たち)に都合のよい(社会)ルールを作り、敗者・弱者を「支配する」(例: 子どものガキ大将)。一方、いままで抑圧されていた者たちが、「自由」を主張して変革・革新を起こす。

(c) 第 2 原理: 「愛」は、人を「愛し、助け、守る」ことである。「一方向の愛」から「双方向の愛」に、そして「助け合い」、「協力・協調する」方向を目指す。社会に虐げられている人(弱者)がいると、助けて、社会を「変革」しようとする。しかし他方、外部から危険があると、外部に対抗して、内部(「身内」)を守ろうとし、内部を統制・束縛することがある。

(d) 「自由」が「自分の幸福・利益」を求めると対して、「愛」は「みんなの幸福・利益」を求め、両者はさまざまに対立する(「矛盾」を持つ)。

(e) 各人の「倫理」が不十分のとき(例えば、「悪の心」を動機に持つとき)、その人が主張する「自由」も「愛」も本質的に損なわれる。だから、人々に「倫理」が正しく理解され、実践されていることが、「自由」をも「愛」をも有意義なものにし、「自由 vs 愛」という「人類文化の主要矛盾」を少しでも解決する根本基盤である。